

成熟しつつある精神保健福祉士の仕事とこれから

日本福祉大学教授 若松 利昭

精神保健福祉士（以下、PSW）の仕事の基本は、障害をかかえた人たちの「生活」を支援することにあります。これが、今回の調査で明らかになったことです。生活の場所がどこであっても、生活は切れ目なく継続しており、こまごまとしたさまざまな生活回りの膨大な出来事への対応と、人と人との関係で成り立っています。障害をかかえた生活の過程にかかわり続けることが、PSWの仕事の基本であると考えています。

私たちの生活は、問題として定位できる事柄だけではなく、定位できにくい状況をかかえています。短期間で一挙に問題解決を図ることは困難です。障害をかかえた生活を「創り上げること」を支援することが、生活への支援の基本にあります。PSWは、日常のこまごました問題の解決から、生活をどのように組み立てるかまで、さまざまな問題をクライアントと共有することを支援の守備範囲としています。仕事の範囲と方法、支援の考え方は、PSWたちのこれまでの歴史を通して職業的な熟練として形成されてきており、また、支援の考え方が時代に伴って変わっていくなかで、新たな職業的熟練が形成されつつあります。年代別にみた仕事の熟練度の上昇と仕事範囲の拡大が、職業熟練の発達の様相を示しています。

PSWは、組織に属して仕事をしています。組織のなかで、支援の固有の役割を担っています。組織は支援の目的を機能化して分割したものです。これは機関と呼ばれます。かつては病院で働いていたPSWが、現在は機関の多様化に対応して、さまざまな組織で仕事を行っています。それぞれの組織の目的に対応して、

PSWの仕事が多様化してきています。生活支援を核としながら、それぞれの組織の目的に対応した仕事とその技能を生み出しているのです。

地域での活動を展開する人たちがいることも一つの特徴です。当事者の人たちと生活の場を確保する活動がみられます。地域・在宅支援の方向が進むなかで、また、さまざまな支援の方法が取り込まれるなかで、新たな試みを行う人たちがいます。新しい支援の方法だけではなく、これを地域のなかで実現する試みが展開されつつあります。この活動は時代を先取りする試みであり、組織的な関係のなかでは実現しにくい、人と人との直接的・対面的な共有する関係を、自らが創り出す試みでもありましょう。

今回の調査結果を概観すると、さまざまな問題をかかえてはいますが、PSWの仕事の内容が明確になってきていることが示されています。これからは、「障害をかかえている人たちが」PSWをどのようにみているかの検討が必要になってくることと思われます。PSWと障害をかかえた人たちとの関係を明らかにする作業を通して、スーパーバイズの内容やケース検討の方法を、PSW自らが生み出すことを求められているように思われます。仕事のかたちができ上がってくると、仕事の定型化と形式化が進行します。これを打破すること、固い組織を柔らかな仕組みにすることも課題となりましょう。仲間内の関係だけではなく、さまざまな分野の人たちとのコラボレートが必要になると思われます。

